

## テモテへの手紙第一 第1章 19節

「ある人たちは、正しい良心を捨てて、信仰の破船に会いました。」

秋の名残の陽射しのなか、一匹のトンボが目の前をよぎる。稲穂の上に群れて飛ぶのではない。風が吹きわたる広々とした野原を飛び交うようではない。街の狭い通りをなんとなく弱々しく飛んでいる。群れから迷い出たのか、生き残りなのかわからない。一匹でもなお飛んでいる光景に目が引かれる。

ある人たち、と語る者も一匹のトンボのようであったかもしれない。パウロが地上での使命が終わるころに残した手紙の一文である。あるときは群れをなし、また他のときは小グループとなり、さらに小人数で、そして獄中一人となり主イエス・キリストのご用で奔走した。その全行程はお仕えする主イエス・キリストの恵みのゆえに感謝と喜びに満ちるものであった。

しかし、主イエス・キリストにお仕えするゆえに霊の闘いはある。本人自身の闘いの凄まじさの詳細は別として、ここにひとつあげている。そのなかで、地上の生涯の終わりに至って、最後の手紙で取り上げるのは魂が痛む事実である。ここまで忠実に仕えたが、ある人たちが、正しい良心を捨てる。一度主に与えられた心を捨てる。信仰の破船に会っている。一度与えられた信仰が木っ端微塵になりそうだ。

2023年10月16日